



パンドラの箱

12月25日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月25日のおはなし「パンドラの箱」

毎年この季節になると、おとうさんが大泣きした日のことを思い出す。

「おとうさん」

「ちょっと待っとれんのか！」

階段を降りて、声をかけようとしたのだけれど、その日は朝から立て続けに次から次へと難題が降りかかっている、わたしはけんもほろろに追い返されてしまった。仕方がないので台所に入り、夕食の支度を始めた。その間にも電話がジャンジャンかかってきていて、おとうさんが不機嫌そうに対応する声が聞こえていた。

なにしろまず朝一番で、霞乃健康食品の倒産が伝えられたのだ。この数ヶ月、支払いがなく、それでも長年のつきあいだからと納品を続けていたのに、それがすべて踏み倒されたことになってしまった。その金額を回収できないということは取りも直さず、おとうさんの会社にとっても甚大な打撃だということは子どものわたしにだってわかった。

あちこちに電話をかけ始めた父の後ろ姿を見ながらわたしは学校に出かけた。そうしたら学校に連絡があって、留萌のおばあちゃんが倒れたから帰って来いという。できるだけ早く留萌に向かわなければならぬけれど、飛行機が欠航していていつ飛ぶかわからない。とにかく早く戻ってきて支度をしろということだった。3時間目の途中でわたしは早退して家に向かった。

こういう時、他の家ではどうするのかわからないけれど、うちはおとうさんとわたしと2人だけの家だから、父が家を離れるとわたしは1人になってしまう。そして父は絶対にそんな風にはしなかった。わたしは家で一人留守番したって構わないし、逆に北海道まで飛行機に一人で乗っていくのも試してみたのだけれど、おとうさんに言わせれば言語道断な話だった。おかあさんがああいう形で亡くなったのもう二度と家族を目の届かないところにおきたくないと、そう思っているのはよくわかった。

けれどわたしももう高校生だし、もうすぐ大学にも行こうという年齢だ。おとうさんの気持ちはありがたいと頭ではわかるけれど、正直に言えばかなり煩わしかった。できるだけひとりにして欲しいと感じることも多かったし、「もう子どもじゃないんだから」と放っておいて欲しいこともしばしばあった。軟式テニス部の夏合宿も行かせてもらえなかったことは、内心もう絶対許せない、というほど恨んだ。でも毎朝食事の前におかあさんの仏壇に向かって手を合わせて、わたしのことをまかせろと言っている姿を見ると、何も言えなくなってしまった。

家に戻るとおとうさんはまだあちこちに電話をしていて、聞いているとひどく気が立った様子で、わたしでもはらはらするほど乱暴な口調になっていた。相手に失礼なんじゃないか、相手を怒らせてしまうんじゃないかと気が気でなかったけれど、でもそんな口調になってしまう気持ちもよくわかった。おとうさんはとても真面目で、とにかく誠心誠意お客さんが喜ぶように仕事をする人だったから、その努力が報われているうちはいいけれど、理不尽な形で報われなかった時、だまされたような裏切られたような気持ちになって、怒りをこらえることができなくなってしまったのだ。

そこへとどめのような連絡が入った。いままで応援してくれていた地元の金融機関が手を引くと通達してきたのだ。わたしが郵便屋さんから受け取った封筒をひったくると、関係ない封筒を突き戻し、その金融機関からの封書を開け、せわしなく読んだ後、おとうさんはこたつの前がっくりと腰を下ろし、肩で息をしながら何ごとか小さく呟き始めた。詳しいことはわからなかったけれど、本当にとんでもないことになったということだけはひしひしと感じられた。わたしは2階に上がって、他の封書を開いて中身を確認した。

それから階段を降りておとうさんに声をかけたのだけれど、追い払われてしまった。「ちょっと待っとれんのか！ 北海道に行く支度でもしとかんか！」わたしは2階に戻るか、夕食の支度を

するかで悩んだけれど、何か食べて落ち着いた方がいいと思って台所に入った。おとうさんは家の中で何が起きているかなんて全然気づかずに、気づこうともせずにこたつに向かって呟き続けていた。

夕食までに何本か電話が入り、おとうさんはそれでも何とか受け答えができるまでに回復していた。さばの味噌煮とほうれん草のおひたしと肉の少ない肉じゃがを並べながら、わたしはもう一度おとうさんと呼んで話しかけてみた。でも返ってきたのは憤然とした返事だけだった。

「うん？」

「さっき郵便屋さんがね」

「その話はもういい。おまえはそんなことは考えんでいい」

「ううん、そうじゃなくて」

「なんだ」

「さっき届いた封筒を開けたらね」

「何を？」おとうさんは急に声を大きくした。「何だ！ まだ何かあるのか！ これだけじゃまだ足りないっていうのか！」

そう言うとおとうさんは、さっきの封筒をこたつにたたきつけ、その勢いで味噌汁の椀がひっくり返った。わたしは泣きたくなるのをこらえながら、やっぱり駄目だ、この話はできない。無理なんだ。もう何もかも駄目になってしまったんだと思いながら布巾で天板を拭いた。その様子を見ながら気の毒に思ったのか、おとうさんは少しだけ声を落として言った。

「何が来た」

どう答えていいのかわからなかった。お金のかかる話だし、いまのように一緒にいられなくなるかもしれない話だから。

「言ってみろ。郵便屋は何を持ってきた」

「.....かくつうち」

「何を？」

「合格通知、届いたんだけど」

「な！」おとうさんは言葉に詰まって、それからちょっとあって、やっとどういうことかわかったみたいだった。「何だと馬鹿野郎！ 何だってそんなおまえ、大事なこと黙って」

そこまで言うとおとうさんの目がきらきらし始めて大粒の涙がボロボロこぼれだしてきて、後はやったなおまえ、よくやった、とかなんとか言うんだけど、もう何を言っているのかちっとも聞き取れなかったんだ。

(「合格通知」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

パンドラの箱

<http://p.booklog.jp/book/41350>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41350>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41350>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.